文学と人生の間

「私」にとって文学とは何か

大河内昭爾著
〈武蔵野女子大学教授〉

過ぎ去るものを、
ただ過ぎ去るものとして見すごす限り、
私たちに出会いはない。
人にしろ、風景にしろ、
それから本にしろ、
私たちの前を多く過ぎ去ってゆく。
しかし、すべてが過ぎ去って
ゆくのではない。

大河内昭爾著

「私」にとって文学とは何か

文学と人生の間

ナツメ社

大河内昭爾（おおこうち　しょうじ）
一九二八年生まれ。早稲田大学国文科卒。
卒業して間もなく淡路書房から『青春文学ノート』なるエッセイ集を刊行、評論執筆のきっかけとなる。
現在武蔵野女子大学教授兼図書館長。
早稲田大学、国学院大学講師。
かたわら味覚文化誌「食・食・食」編集長。
朝日新聞文学散歩の講師を長くつとめ、
いまも朝日カルチャーセンターに「文学風土記」を講じている。日本文芸家協会々員。
主なる著書に、『現代の抒情』（早稲田大学出版部）
『小説家の中の宗教』（編著　桜楓社）
『文学と史蹟の旅路』（学燈社）などがある。

文学と人生の間
●――「私」にとって文学とは何か
昭和五三年五月三〇日発行

著　者――大河内昭爾

© 1978 Syozi Oukouti　Printed in Japan

発行者――田村正隆

発行所――株式会社**ナツメ社**
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田神保町一―五二
電話　〇三―二九一―一二五七
振替　東京三―五八六六一

印刷所――文栄印刷株式会社
製本所――文章堂製本所

●定価はカバーに表示してあります
●落丁・乱丁本はおとりかえします

はじめに

——あとがき的発想のまえがき

われわれが関心をもとうともつまいと、芸術作品としての絵画や彫刻はかたちをもってどこかに存在しているのにひきかえ、文学はどんな第一級の作品だろうと、活字と紙以外の何ものでもない。この至極当然のことが、このごろ私にはどういうわけかとりかえしのつかぬことのように、文学と私のつながりの上で思いかえされてならない。文学というものは、生活とどこで結びつこうと、純粋な意味では読んだ人の胸の中にだけ存在するのである。気障ないい方だが、感動という無形のすがたでしか在りようがないのである。読者がその感動をどうかたちとして創り出していくかは、大げさにいえば人それぞれの運命のようなものだ。この無形のものを求めなが

らも、かけがえのない多くの出会いを、私は無為にみすごしてきた。いまさらどんなにあがいてみても、過ぎ去った年月同様、すでにそれらをひきもどしようがない。かたちある絵画や彫刻だろうと、見るこころがなければ単なるかざりでしかなく、木偶(でく)でしかないが、文学はいっそう読む者のこころのすがたであることを思えば、なおさらとり逃がしたものの大きさを考えるのである。

この稿を書きあぐねていたら、テレビがロンドン塔の壁に刻まれた幽閉の人の爪あとをなまなましくうつし出していた。私もうそ寒い夕ぐれどきそれを見学したことがある。あの必死の爪あとをみて、一種悽愴の気におそわれぬ人もまれだろうが、一方、作家それぞれの爪あとの深さを、われわれは一体どこまで読みとれるものか。また私はどこまで自分の爪あとを文章に残し得ただろう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

か。いわば文学を創るこころの在りようと、それをうけとめる読者のありようという、それぞれの出会いが文学そのものであろう。

ともあれ、文学とは何かという客観的な何かがあるのではなく、「私」にとって文学とは何かを問うかたちでのみ、文学は存在する。

「ナツメ選書」という人生論的なシリーズものが誕生したのを、いくらかよそごとにみていたところ、いきなり私に対しても一冊にまとめよという申し出である。「かくあるべき」という積極人生論は私の苦手とするところで、それ故この種の本にまえがきを書くというのも同様である。以前、『現代の抒情』という自著の序文を求められて、やむなく「あとがき的発想によるまえがき」と銘うって、なにがしか自分の評論の性格すら、そ

こに発見したと思ったものであった。

ナツメ社の田村正隆氏は私の著作の一、二を読まれて、ひどく厚意的にかつ熱心に選書の一冊にと私のものを求められたが、現在の私にはそれにふさわしい書きおろしの余裕も力もないので、やむなく、これまでいろいろな雑誌に書いたものの中から、いく分啓蒙的な性格のものを集めることで、その求めに応じることにした。雑誌の原稿には締切りに追われながらも一応の責めをはたしてきた私だが、それらを整理して一冊の本をまとめることは、いつも思うにまかせず、これまでも二、三の出版社にめいわくをかけてきた。今回も危くそうなりそうであったが、丁重至極ながら、思いがけず強硬ひんぱんなる田村氏の催促によって、とにかくこの一冊が成った。

先にこの選書に一本を上梓された、人生論の申し子のような、この道でははるかに先輩の志村武氏の、当の出

版社顔負けの督促もあずかって力があった。編集部の窪田安弘、黒田庸夫の両氏にも何かとご苦労をおかけしたが、共にしるしてお礼を申しのべたい。

大河内　昭爾

昭和五十三年四月二十三日

目次

第一章　文学と人生の間――9～132

失われた青春と出会い――大原富枝と『婉という女』――10
極限状況の文学――明石海人の歌――17
宗教と文学――吉野秀雄『やはらかな心』をめぐって――37
作家の泣きどころ――丹羽文雄『佛にひかれて』――46
〈悪人正機の文学〉――丹羽文雄『一路』のめざすもの――53
『歎異抄』第二章・第三章――59
文学の面白さ――現象の奥にあるもの――66
日常性の文学――自我の拠点としての日常――77
文学と人生の間――文学と私――88
故郷喪失の文学――自我の確執と彷徨――97
古都三章――同人雑誌を創刊するという学生諸君に――108
自然とこころと旅と――118～132
自然ということ――118
『大和古寺風物誌』(亀井勝一郎)――121
『こゝろ』(夏目漱石)――125
海の詩碑――129

第二章　作家と作品

133～196

小島政二郎―『眼中の人』にみる大正文学の魅力―134
久保田万太郎―『流寓抄』詩人の跡―144
横光利一―『旅愁』の人・昭和文学の先駆―154
井上　靖―その短篇小説にみる人生の警―166
瀬戸内晴美―作家と作品の出会い―179
原田康子―その感性の魅力―186
深沢七郎―反近代の文学―192

第三章　現代小説案内

197～317

読書について―198
「現代小説案内」について―201
『白痴』と坂口安吾―202
『菊坂』『絵本』『足摺岬』と田宮虎彦―208
『点と線』と松本清張―215
『海と毒薬』と遠藤周作―221
『紀ノ川』と有吉佐和子―227
『忍ぶ川』と三浦哲郎―234
『青べか物語』と山本周五郎―241

『五番町夕霧楼』と水上　勉—247
『天才と狂人の間』と杉森久英—254
『天上の花』と萩原葉子—261
『戦艦武蔵』と吉村　昭—268
『海』と近藤啓太郎—274
『カクテル・パーティー』と大城立裕—280
『火垂るの墓』と野坂昭如—286
『回転扉』と河野多恵子—292
『八甲田山死の彷徨』と新田次郎—298
『坂の上の雲』と司馬遼太郎—305
『火宅の人』と檀　一雄—312
掲載誌紙一覧—318

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　文学と人生の間

失われた青春と出会い

――大原富枝と『婉という女』――

一九六〇年度毎日出版文化賞および同年度野間文芸賞を受賞した大原富枝氏の『婉という女』は、土佐藩執政野中兼山の娘の生涯を描いている。次の一節は兼山の政敵のために四十年もの長きにわたって幽閉されていた婉が、藩府から赦免の沙汰がおりてはじめて外に出、「幼い日からわたしたちを捉えていた不思議な音で、風の音とも松籟ともちがう。流れの音だと教えられていた」ものの正体をようやく見た瞬間の息のつまるような新鮮な感動を描いたものである。

朝日はわたくしたち姉妹の背後から草丘のはざまを裂いて、流れの半ばから向う岸にかけて照っていた。日向と陰とでは、川はまったく別の生きものに見えた。日向の流れは珠を砕いたようにきらめき、碧や黄や紅に泡立ってこの世のものならず美しく、玄妙であった。

わたくしたちは短い叫びをあげ、言葉もなくこの妖しくも美しいものの姿に魅せられていた。

――この寸時も定まった形を持たず、一刻も停滞ることのないものの姿を、わたくしはかつて想像することができなかった。

川が人の生命を奪うこともあると聞いたことがある。流れがこのように魅惑に充ちたものであるなら、死を含むことも拒むことはできないであろう。川がこんなにも壮烈なものならばその暴力もまた不思議ではなかった。感動がわたくしの胸を衝きあげてくる。刻々に姿を変え、色を替えて流れる水の不思議さは、わたくしに、これが外の世界だ、自由な外の世界の象徴だ、と思わせた。外の世界ではすべてがこのように、わたくしの四十年の想像とは似もつかぬ形と生命をもってそこに在るのであろう。

このおどろきの新鮮さは、彼女たちのそれまでの言語に絶する重く暗い生涯と対比されて、私たちにもいきいきと伝わってくる。しかし、川の流れ一つを日常私たちはこんなにもみずみずしい感覚でうけとるとはいえない。見なれたものを私たちはいつでもさして心にとめないで見すごしている。旅に出ると私たちは風物の新鮮さを心して見る。しかし通勤途上の風景についてあらためて問われても、今朝見たものすら答えることができない。それはただ過ぎ去るものだからだ。

「行く河の流れは絶えずしてしかも元の水にあらず」という有名な古典の書き出しも、現代語に訳しおわったときそれを理解したと思うだけである。この言葉の本当の意味を納得するのは、別れがたい人と別れるか、死ぬはずもないと思っていた身近な愛する人が死ぬかして、よべど叫べど帰っ

て来ないと、それを身にしみて体験したときだけである。

過ぎ去るものをただ過ぎ去るものとして見すごす限り、私たちに出会いはない。人にしろ、風景にしろ、それから本にしろ、私たちの前を多く過ぎ去ってゆく。しかしすべてが過ぎ去ってゆくのではない。前にかかげた川の流れの描写のすばらしさは、人と自然との出会いが一回かぎりのものとして描かれているからである。『婉という女』が傑作であり得るのは、作者と作品のかけがえのない出会いによって成り立っているからだ。出会いは偶然のように見える。しかしそうではあるまい。偶然の出会いは多く見すごされてしまうだけだ。かけがえのない出会いは、それぞれが一個の運命なのである。運命は偶然によってもたらされるように見えながら、決してそうではない。その人の生き方のたしかな手さぐりに、いつか自然にたぐり寄せられてくるものである。

「婉の幽囚を描くとき、私は自分の青春の日の十年にわたる療養生活を思った。このことは作家と作品とのあいだに通いあう一つの秘密な営みであったと思う」と作者自身語っている。しかし病床十年が婉という女に関心を抱かせた最初ではない。作者は婉と同じ土佐の人である。幼少から郷土の偉人野中兼山については多く語り聞かされてきたし、その遺族の悲劇も少女時代の心にかげる暗い物語として記憶していたにちがいない。語り伝えられた物語があったにしろ、それだけで作品が成り立つわけではなかった。

昭和五年十八歳のとき高知女子師範の教室で喀血して絶対安静の生活に入った作者は、昭和十六年生家の没落を機に上京、十九年帰郷した折、野中婉の資料を求めて県立図書館にゆく。そこで資

料の乏しいのを館長にかこつたとき、館長が起って渋紙に紐をかけた包みをもってきた。それが婉の自筆の手紙二十六通であった。うち二十四通が谷秦山宛のもので「信書の秘密を犯す思い」を幾度も味わいながらそれを作者は書きうつした。その翌年高知市は空襲にあい手紙は焼失して、作者が作品の「あとがき」でのべるように「この婉の自筆の手紙を見ることができたということが私と婉との決定的な結びつきになった」のである。そして書き写された書簡は、唯一の所有者たる大原氏にのみ、明け暮れその深い思いを語りかけるようになる。しかし作品が誕生するにはそれからまた十五年もの歳月を必要としたのである。

執筆期間はわずか半歳にしろ、十八歳の喀血をもってはじまった十年に及ぶ幽閉にひとしい療養生活、そして戦中戦後の時代そのものが窮乏のさなか、再発に悩む死と隣りあった生活を経て、『婉という女』を書きあげたとき、作者もすでに婉同様四十歳をこしていた。過去に材をとる歴史小説であるが、作者には歴史小説を書く意識はまったくなかったという。作者はまぎれもなく、自分を描いたのである。十年臥床の恨みが、幽囚四十年の婉の情念にこめられて、作品ははげしいいのちを与えられた。

「三十歳代のとき、どうしても書けなかった作品をやっと書きあげたとき、私は四十歳を越えていた。四十三歳で幽獄を出た婉の生涯を書くためには、私もまた四十年の女の生涯を生きてみなければならなかった、ということであろう。（略）この作品を書くことで、私もいわば四十数年の女の生命を生き直したのである」と作者は「私の取材ノート」に書きしるしている。婉がはじめて見た川

の流れに心を奪われるためには、長い自然との隔離を必要とした。川の流れの新鮮さを謳うにも、十年の病床から起って大地をふみしめるよろこびが賭けられている。近代文明のために自然を失ってみて、ようやく私たちが自然の尊さを知ったように、出会うということはいつでも犠牲を強いるものなのであろう。作者は青春を失ってはじめて婉のこころをつかんだのである。

*

『婉という女』の跡を訪ねて私は四国へわたった。土佐宿毛は「高知の城下とは三十里をへだて、人さえなかなか通われぬこの土佐の西の果て、瘴癘の地」と作品にしるされている。南国とはいえ、すがれた風景に心をわびしくして、海近くせまった山と深い入江をかかえて路地だけ妙にいりくんだひなびた港町に私が着いたのは、すでに夕暮れ近かった。路地へ入り、またムダに海ぎわにひきかえしたりしながら、それでも目あての場所を陽のおちる前にあぜ道の果てに見出した。それともみえぬ、つましい道標のような石の角柱が、おいかぶさるような山を背にぽつんと立っている。近づくと意外に明瞭な文字が刻まれていて、まぎれもなく「野中兼山遺族幽閉の地」とよめる。古井戸と小さな一体の地蔵尊が横に並んでいた。

婉の父兼山は自己の理想に憑かれ、二十二歳で藩の執政にのぼってから失脚までの二十八年間、わきめもふらず藩政の改革に、わけても治水や開拓事業にひたむきな情熱を傾けた。吉野川流域に新田をひらいたのをはじめ、室戸港を修め、仁淀川沿岸の開発をするなど、息つく間もなく大工事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com